

「波打ち際まで」

鹿島田真希

もう一日が終わってもいいというその時から、女の一日は始まる。男がいるから、男のために、という理由で、それぞれの野菜を切り、ソーセージ、コンソメなどを入れて、ポトフなどを作りはじめる。本当はポトフなど、簡単な料理で、もっと自分は手のこんだ、自分の欲望を満足させる料理も作れるのだけれども、そう思いながらも男の要求する自分の欲望を満たさない料理を作る。

女はじっと、その鍋の中の混沌を見つめて、ああこの混沌はどこか見覚えがある。自分が少女の頃から感じていたこの混沌、それをデジャヴのように思う。少女の頃から聞いてきた別の少女たちの噂話、自慢のし合い、自意識過剰からくる異常な興奮状態。女はそれに寄り添うこともできずに、淡々と、しかし漠然とした孤独と憂鬱の中で、少女を演じていた。教室という空間の中の、制汗スプレーと、ヘアムースと、マドレーヌの匂いに窒息しそうになりながら、女は蛇のように教室を這って生きてきたような記憶があるが、その中にいた時の混乱状態と受難のおかげでその記憶は確かではない。

あの若い男の先生は、私のことをいやらしい目で見ると、だけど私の方はあの先生のことこれっぽっちも好きじゃないのよ。私の好きだったアーティスト、人気がない時から私はファンだったけど、人気が出たからファンやめようかと思うの。あの子のこと、みんなかわいいうっていうけど、私の好きな顔じゃないな、美人っていうより、かわいいうって感じっていうけど、それってきれいじゃないっていう意味でしょ。

メレンゲのように浮かんでは消えていく中身のない会話。それは確かにメレンゲで、軽いものではあるけれども、少女たちにとっては最大の関心事。関心事とはつまり、自分たちの有り余る生理的感覚をどれだけ発散できるかということ。女は少女たちのこんな発散をただ、金魚が酸素を求めらるるようにはくばくと呑み込んで、腹は膨れ、妊婦のようになり、身体が破裂する危機を覚えていた。

そして女は少女の頃、教師にこう言われたのを覚えている。あなた、なんか青ざめて苦しうだけけど、大丈夫？ それから苦しうなのに、なんとなくぼうっとして、うっとりしているみたい。一体なにを考えているの？ 集中できているの？ と。

女は自覚していた。自分はある発作の直前の恍惚状態にあるということ。そしてそんな恍惚状態のまま、大人になり、一人の男と知り合った。もう少女の頃のようにあのメレンゲみたいな不満と愚痴は聞かなくても済むと思ひ、女は男と知り合つて、その男が好きかどうかわからないまま一緒になる。

しかし女はある時男に言われる。君の言っていることって一本筋のようなものが通っていないね。なんか泡みたいに消えていくような、雲をつかむような話を聞いているみたいだ。

泡、雲、と聞いて女は思ひ当たる。ああ、これは、私が少女の頃、メレンゲと思つていたあれのことだ。空虚な生理の発散のことだ。女は男の話を聞いて怖くなる。自分であんなに苦しめ、不安にさせた、あの膨れ上がる空気の塊を自分の中で大きく膨張させて、嘔吐していることに。

女はすぐに男に謝る。かつての教師の前にいた時のように青ざめて。しかしなになにに謝つたかもよくわからない。ただ、自分を隠してくれる男が離れないように、言い

訳のように謝る。ごめんなさい、今日の私はなんていうか、ちよつと変なのよ。話というものは、あなたの言うとおり、筋が通っていて、石の修道院のように構築的なものでなければならぬものよ。ごめんなさい。ただ気分が変なだけなのよ。

女の気分が変なのは、すでに女が少女の時からののだが、女はまるで一瞬のことであるかのように振舞った。これで私を隠してくれる存在が離れてしまわないのなら、そう思つて。

女は石の修道院という言葉を使つてしまった時、罪悪感を覚える。女は以前から男のことを石の建造物のようだと思つていたからだ。大きいけれど、温かくない。むしろ冷たい。安心するために、身を寄せたけれども、男の近くでまだなにかに怯えているような気もしなくもない。この人はなにかしら、と女は思う。こんなに大きな存在が近くにいるのに、この漠然とした不安はなにかしら、と。

女はぼんやりと気づいている。石の修道院の上には、それを見下ろす暗雲があるという。それは冷たい雨を修道院に浴びせて、稲妻を落とす。その時、修道院は崩壊してしまわないのかしら、その時、私は嵐にさらされてしまわないのかしら。女は恐ろしくなる。この男は私を不安にさせるし、冷たいところもあるみたい。だけど、私はこの男を頼るしかない。依存するしかない。私はもう、この人の中毒だ。

ある痴情沙汰の事件が起こった。女は男を愛していたのだけれども、酒に毒薬を混ぜて殺してしまった。女は心中を図るつもりだったのだろう、海に飛び込んだがすぐに発見されてしまった。その衝動はある日突然訪れたものらしい。人から聞く話といえば、その二人は仲がよかつたということばかりだ。女は普段、びくびくとしていて、とても

心中を凶るといふ感じでもなかったらしい。家のことを律儀といえるぐらいこなして、男のシャツは糊がきいていて白く、台所の換気扇からは、砂糖のたっぷり入った醬油の匂いがしていた。

女は実に幸せそうだった。びくびくはしているものの、いつも笑顔で、男が誕生日にくれたというラベンダー柄のエプロンをして、早い時間にごみを捨てに来ていた。このエプロンはあの人が買ってくれたの、私、本当に嬉しくて、これを大切にしているの。それがこの女の口癖だった。

女はメロドラマや娯楽小説が好きだったようだ。隣人に、ねえ、あんなに悲しくて、感動できることって、実際の人生の中にはあるのかしら、とよく言っていたらしい。その時、女は本当に目を赤くして、時には本当に涙を流して、その空想の世界に浸っては、感情をゆるませていた。

あんなに穏やかそうない人がねえ、と隣人は言う。あんなに男の人を愛していたのに、どうして心中なんて。人って本当にわからないわねえ。隣人たちは噂話を共有する。そして、それがまるで快樂かのように何度もその話題に触れる。なんべんも。それは女が海に飛び込んだ時に、なんべんも波に打たれたことに似ている。

ある時、女は隣人にこう言った。ねえ、海ってなんであんなに形がないんでしょう。波はどうして何度も寄せては返すのでしょうか。それなのになんの変化もない。不思議ね。隣人たちは何故女が突然海の話などしだしたのかと思っただろう。

波は何度も同じ行為を繰り返すが、最後にはなんの変化もたらさない、私たちの生活ととてもよく似ているわね、と女は言った。ほら、私たちって料理を作ったり、洗濯したり、毎日同じことをしているでしょう。だけど、毎日それを繰り返しても、なに

も積み重なることもなくて、時だけが過ぎていくでしょう。私、ここ最近、なにも学んだことがないみたい。なにも発見したこともないみたい。わかったこともない。心の成長すらしていないみたい。本当に、毎日こんな生活でいいのかしら。

でも、と女はため息をついたそうだ。こんなこと、悩みとすらいえないのかもしれないわね。だって、男の人って本当に忙しく働いているもの。毎日、革命を体験しているようなものだと考えなければならぬ。それを考えると、革命のない毎日を過ごしている私は、とてもありがたいはずよね。

だけど海を見ていると少し不安だわ、と女は言った。毎日波が寄せて返っていく。それを繰り返しているから、あんなに冷たいのではないかしら。あんなに青ざめているのではないかしら。本当はなにかが少しずつ忍び寄っているのではないかしら。海がある時、突然崩壊してしまうということはないのかしら。

隣人たちはその話を単なる女の空想だと思っていた。この人は時間が余り過ぎて、メロドラマも見すぎているからこんな想像をするのだとばかり思っていた。そして隣人たちは、自分の子供や夫に対する不満に心を囚われており、女の悪夢についてよく考えることをしなかった。

そして女はたまにそんなとんでもない空想をしては、日常生活に戻っていった。それはまさに波が寄せて返すのと同じなのだが、そのことに気づく隣人たちは誰もいなかった。

隣人たちは誰も知らない。女本人ですらも。少しずつ忍び寄ってくる、漠然とした大きなものに。それが仕事で男が毎日体験する、革命に匹敵する規模であることにも誰も気づいていない。

心中事件の背景はこのようでありふれたものだった。どんなに事件の真相を明らかにしようとしても、しばらく明らかになりそうにない。その謎は、波が何故寄せて返すのかということと同じことなのだから。

その女は隣人の女たちとまるで変わったところはなかった。不穏な気配を孕みながら、日々生活するために、手を動かしていた。毎日、ごみを出したり、新聞を取り出したりする時に、隣人に顔を合わせて、おはようございます、今日もいい天気ですねえ、と言った。ただ、女が違うところといえば、いい天気でありがたいですねえ、と言ったことぐらいだ。ありがたい。一体、誰に対してだろう。海ぐらい大きなものに対して、ありがたいと思っているのだ。女はなにか壮大なものの存在だけは漠然と知っていた。

女は新聞でこの心中事件のことを知る。なにを見ているの、と男が尋ねる。社会のことなんか、世の中のことなんか、まったく興味のない君が、一体新聞でなにを読んでいるの、と。女は、罪悪感からか、その新聞を閉じて隠す。なんでもないの、ただ、そうね、編み物のことが記事になっていたから、いつもよりちよつと気になって読んでみただけ、今日はなにを食べたいの。

女の手の中には新聞がある。女は何故か、新聞から自分の体温を奪われている気分になる。興奮して、頭に血がのぼったのは、どうしてかしたら、一瞬だけ、後は急に血の気が引いて、体温もどんどん低くなっているみたい。これはなにかしら。身に覚えのない感覚だわ。女を同情するかのように、二人の黒い飼い猫が、女の脚に身体をこすりつける。その時、圧力鍋が沸騰する。

ああ、と女は鍋の火を止める。なんだか私、ぼうつとしていたみたい、ごめんなさい。

ごめんなさい、ごめんなさい。女はいつも男に謝る。悪くなくても男に謝る。この人がいなくなってしまうたら、私は崩壊してしまう。私自身が崩壊してしまう、というのは、世界に終わりがくるのと同じことだわ。世界は私一人いなくなっても関係ないというけれど、私はそうは思わない。私の中の最大の関心事は私自身だけ。だから、私が終わった時、世界も終わるのよ。だから私はこの人に謝るの。いつでもこの人の翼の陰にいたいから。世界が終わらないようにしたいから。

だから、と女は手の中で新聞を握り締める。だから、私はこの新聞の中のこの人が男を殺して、自分も海に身を投げてしまうというのはよくわかる。だっていつまでもこの人を思っているのは苦しいことだもの。だから終わりにしてしまいたいとも思う。この人との関係も、世界も、全て。

この男の関心事の全てを自分のものにできないことはわかっている。だから私はいつも、この男の中毒で、この男の禁断症状でもある。禁断症状は苦しいから、いつそのこと、この男を殺して、自分も殺してしまいたいと思う。

それから毎日女はこの新聞記事の切り抜きを持ち歩き、心中事件について考えるようになる。灼熱の圧力鍋を眺めながら。あの女が盛った毒薬というのは、どういうものなのかしら。どのようにして手に入れたのかしら。その毒薬が入った酒をどうやって飲ませたのかしら。

それに、と女は考える。海に身を投げるといえるのは、どういう気持ちだったのかしら。どうしてこの女は海に身を投げることを選んだのかしら。海はどのぐらい冷たいのかしら。水の中で息ができないというのはどのぐらい苦しいのかしら。死ぬというのはどのぐらい残酷なことなのかしら。

そんなことを考えていると、男が、今日の夕飯まだ？ と話しかけてくる。そこで女は考えを中止する。女は男の話を書く。会社の人間の話、仕事そのものの話、世の中の経済の話。女は自分の作った料理を食べながら相槌を打つ。しかし頭の片隅で心中事件について考えている。まるで通奏低音のように。

そしてある時、女は言う。ねえ、海へ行ってみない、と。こんな季節に、と男は驚く。こんな涼しい季節に海なんか行っちゃって、灰色の水面と、白い波が岩に当たって砕けているのを見るだけだよ、と。

それでいいの、と女は答える。私はどうしても、涼しい季節の今でも海へ行ってみたいの。泳ぐために行くわけじゃないからそれでかまわないの。ただ、海と対峙するために、海へ行きたいの。

女の不吉な提案に男はなにも気づかない。ただ、冷酒の入った切り子硝子の杯を傾けて、おや、杯の中に月が映っている、美しい夜だね、などと言ってみたりする。そうね、と女は答える。夜というものはいつも美しく、穏やかなものよね。そして心の中で、私が絶叫してしまいたいと思うのはいつも昼だから、と思う。

ねえあなた、本当に私のこと好き？ 青ざめて女は尋ねる。男は驚く。馬鹿だなあ、好きじゃなければ一緒に暮らしていないじゃないか。そういう意味ではないの。女は呟いて黙る。そういう普通の好きでは私は満足しないの。普通の女を愛するように私を愛しては欲しくないの。もっと別の愛し方で私を愛して欲しいの。

女は思う。自分の女性の部分なんて本当は興味を持って欲しくもない。私がまだ女性になる前、少女の頃、あの窒息しそうだったあの頃を振り返って、この混濁した意識を整えて、愛して、保障してほしい、と。私の過去までこの人が愛してくれたらどれだけ

いいだろう、と。

女は小さい声で、あなたは私のことなんか愛していないのよ、と言ったが、男には届かなかった。

多くの女たちが今日も鏡に自身を映し出している。女たちは櫛で髪を梳いて、紅をさし、香水を振り掛ける。誰のためでもない、男のためですらない、ただ、自身のために。女たちは鏡に自分を映してうっとりする。自分とそっくりな少女があらわれたら、その少女を食らい尽くしてしまうだろうということを知っている。男などに冒瀆されることなく、自己の投影を自分で全て食らって、完結してしまうことはどんなに満足なことだろう、と想像する。

ふわふわと女たちが薄衣うすぎぬのようなものを纏って、飛び跳ね、じゃれあい、笑い合う。自分たちは快樂の絶頂にいる。苦しいことなど、過去も、将来もないというかのように。パステルカラーのマカロンを分け合い、目配せをして、次にはどんないたずらをしようかと考えている。彼女たちは、かのパールベックの海岸にいた乙女たちのように、それぞれがあまりにも似すぎていて、乙女の集合体であるというだけで、それぞれに個性がない。

乙女たちは永遠に朽ちることなく、それぞれの個性をなくしたまま、戯れているだろう。嘔吐したくなるような不潔な手に触れられても、忘却と無視という最も残酷な仕打ちを与えるだろう。そして冒瀆された事実など初めからなかったかのように彼女たちは振舞うだろう。

彼女たちを犯すことができるのは、神聖な冷感症の病だけ。彼女たちが朽ちないのは、

そもそも彼女たちが鉱物のようにたまたまなく無機質であるためだ。乙女たちは、漂いながらも、また自分たちと同じ種類の、周りを漂う兆しに捕らわれつつある。忍びよるメランコリックの漆黒の影。女たちの身体を肉以外のものにしてしまう、情熱のない狂気。そもそも心中事件に駆り立てられた女も、もともとはこのような太陽の乙女で、海に身を投げる未来など予測もしていなかったが、それは確実なテンポでやってきたのだ。だから、ある男に愛されているのかいないのか、曖昧な関係が続ける一人の女にとっても痴情の沙汰は身近なことだった。女の圧力鍋が火にかけるとすぐに沸騰して、絶叫してしまうように、女も行動に駆り立てられるかに思えた。

しかし多くの女たちにとって、毒薬を買うにはあまりにも根気が必要で、刃物は持つには重かった。だから、多くの女たちが不吉な予感を覚えながらも、一生心を騒がせながら生きていくことになるだろう。

だから、女は今日も圧力鍋に火をかけて、心中事件について夢見る。まるでそれが快樂であるかのように。白濁した鍋を覗きこみながら。メロドラマのように。女にとってそれは最大の関心事ではあるが、彼女にはそれを行動に駆り立てるほどの活力すら残っていない。だから、女はただ想像して、恐ろしい、と言い、いつか自分もそれをするかもしれないと考え、また、恐ろしいと思って、想像することを中止してしまう。

ある時、女はごみを捨てに行く時、旅行かばんを持った夫婦と、リュックサックを背負った子供を見た。海へ行くんです、と妻の方が言った。こんな季節ですけど、もう涼しいのはわかっているんですけれども、息子が、うちの王子様が、海へピクニックへ行くって不思議ときかないんです、だから、夫と車で海へ行くことにしました。

へえ、そうですか。女は答える。もう涼しいのに、もう寒いぐらいなのに、気をつけ

で行ってきてくださいね。今、波にさらわれてしまったら、きっと大変なことになってしまいますから。

どうかしたんですか、夫の方が言った。なんだか具合が悪そうですね。唇も紫色ですよ。食べていないんですか、寝ていないんですか。

そうなんです、と女は告白する。最近、妙に身体がほてったと思ったら、急に寒くなったりとなんだか体調がよくなって。

ちよつと気を使ってよ、と妻の方が言う。私たちの年の女っていうのはね、身体に色々な変化があるんだから、それを口に出すなんて本当にあなたって人は。

妻は、ごめんなさいね、と女に詫げる。私はわかっているから、と。

ねえ、早くしてよ、と息子が言う。早く海に行こうよ、と妻のスカートを引っ張る。

本当にうちの我がまま王子はどうしようもないわねえ。行ってきます。

行ってらっしゃい、と女が言う。と家族は車に乗った。車が走り出す。

お気をつけて、と女は車に向かって呟く。